

第 2 回浦昭二記念賞受賞の言葉

松平 和也

会員の皆様へ

私は、昨年 1 1 月に 75 歳の後期高齢者になったのですが、その時期に、学会の名誉ある賞をいただいてとてもうれしいです。研究者で言えば、ノーベル賞に匹敵すると、巷間噂ある！凄い賞と認識しています。会員の皆様方に感謝申し上げます。

恩師の浦先生記念賞ですから、うれしさ倍増です。告白すると、学生時代に浦先生から、A をいただいたことはなく、BorC しかなかったですよ。また、浦ゼミに応募したのに、君には無理だよと言われ、結局先生のゼミに決まったのは、女子学生 3 名と男子は市川君（元三菱電機、新潟国際情報大学、静岡大学の教授）だけでしたからね。まー、劣等生の私に、先生が創設された本学会でのいろいろなお役目のなかで、雑役をやれと言われて、嫌がらずにお手伝いしたのを認めていただいたのが、本賞を手にする榮譽にいたったのかなーと思っております。

私、小さいときから、大言壮語することがありまして、その理由は、親父の口癖が耳に残っているからなのですよ。親父は、何かあると『敵が 1 千万人といえども、我行かん』と言うのですよ。正義感の強い親父でして一、弱いもの虐めはするな！ 約束は守れ！ 母親に口答えするな！など、耳にたこができるぐらい言われました。柔道や相撲を小学生になってすぐやらされました。私がやりたかったわけではなく、親父がやらせたかったのです。たとえば、相撲で、時々柔道の技を使って、相手を腰車とか派手に投げ飛ばすと、あれでは、投げられた子がかわいそうだよ、痛いからねー、と言うのです。そして、父親から教えてもらった技は、つり出しでした。これだと、相手に優しく勝てるのですよね。最近話題になっている白鵬関のように、張り手、かち上げ、土俵際勝負あり後の乱暴な振る舞いなどは、武士の情けをしらないのですよね。相撲道を教えなくてはいけません。なお、私は、大学生になると、30 億人の人のためになりたい、なんて放言しておりました。今は、家内の助けを得ないと、自分自身、毎日が不安ですが！

それにしても、大学 2 年生時、電子計算機を勉強して、よかったですねー、社会に出ても、大言壮語して、私は、電子計算機のことを熟知する経営コンサルタントであると、自分を経営者に売り込めたのです。あの時代、大企業の経営者が、電子計算機というものに、大金を払いながら、それを使いこなすのは大変なことだと、導入後に知って後悔していたのですよ。そこが商いのポイントでした。(笑い)、ハードウェア、ソフトウェアが無ければただの箱、と言い、ソフトパッケージを売りまくりました。電子計算機の勉強をしながらも並行して、人間工学という学問も勉強し、疲労の研究や人間心理の研究にも興味を持ちました。文学部印東教授の心理学講義はためになりました。情報システムを開発するのは、目に見えない高層ビルを立てるようなものですと、リスクを啓蒙し、PRIDE 方法論を日本語マニュアルにし、教育つきで販売したのですよ。情報システムの役割は、利用者である人間のためでなければならないと、人間中心を謳ってきました。人間に優しい情報システムを作らねばならないと浦先生が説いてきたことを、何とか具体的に実践につなげたいと思つて 4 5 年間やってきました。

監事 松平和也